



Title	『中井木菟麻呂キリスト教関係草稿類』 翻刻と解説 (三)
Author(s)	佐野, 大介
Citation	懐徳堂研究. 2014, 5, p. 91-101
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50989
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『中井木菟麻呂キリスト教関係草稿類』翻刻と解説（三）

佐野大介

一、解説

はじめに

本稿は、大阪大学附属図書館懷徳堂文庫内新田文庫蔵『中井木菟麻呂キリスト教関係草稿類』の内、「儒仏耶三教比較結論」の翻刻及び解説である。¹⁾『中井木菟麻呂キリスト教関係草稿類』翻刻と解説（一）²⁾（『懷徳堂研究』第三号、二〇一二年）、「『中井木菟麻呂キリスト教関係草稿類』翻刻と解説（二）」（『懷徳堂研究』第四号、二〇一三年）の続編にあたり、本稿で完結する。

内容解説

儒教・仏教・キリスト教の三教を比較し、三者の優劣

に関する結論を出したものの。原稿用紙仮綴。全十葉。題名に「三教」とあるが、仏教批判が紙幅の大半を占める。藍色罫の原稿用紙を用い、上部欄外に朱で章名とおぼしきものが書き入れてある。朱にて句読点を施し、また、所々に朱にて圈点が付されている。

章名および内容は以下の通り。底本には付されていないが、便宜的に章名に番号を附した。

一、「三教相対」の礼。「東洋の宗教及び倫理に對しても、我等又精思細考して、取舍宜しきを得べき必要あることを感ずる」として、三教が互いに尊重しあうべきとの理念を述べ、

諸宗相敵視するが如きは、舊時代の狹量なる思想にて、兎戯に類する者といはねばならぬ。

と、融和的態度を表明する。さらに、儒教と仏教について、「儒教は實踐道德に於て、佛教は宗教及哲學に於て」見るべきところがあり、

我等は木石に崇拜する幼稚なる古来の偶像教と同じ視すべきでない

とする。当該資料に神道に関する言説は見られないが、この句を以て推すに、高い評価ではなかったものと思われる。

二、「儒教崇天の概念」。儒教の天は、キリスト教の天に近いとし、儒教を、

儒教は基督教に由りて其缺漏の補足せらるゝを待つ者

儒教が基督教に因つて完成せらるゝを待つと見るべき

ものと評価している。この論法及び結論は、「返信1」「返信2」での、「古聖賢」に対する評価と同様のものである。

三、「婆羅門教」。仏教前史としてインドのバラモン教

に言及し、バラモン教を汎神教とする。

四、「仏教の史的証徴の不正確」。キリスト教史が正確であるのに対し、釈迦の誕生譚が不正確だと断ずる。

五、「仏陀の伝記と福音經の記事との比較」。釈迦の誕生譚とイエスのそれに似たところがあると指摘し、しかし釈迦は裕福な生まれであるからイエスとは「精神上に非常の懸隔」があるとする。また、仏教の奇跡譚は、「道德上作善の目的」を持つキリスト教の奇跡とは全く異なり、

たとひ實際に行はれたりと假定しても、眞実の奇跡が目的とする所の道德上作善の目的に比すれば、意義なき者多くして、徒に奇異の顯現を以て人を駭かに過ぎない

とされる。

六、「仏教無神論の起因」。仏教成立時、仏教と対立した汎神教と多神教とが、仏教に較べて「宇宙の大問題」を解決する能力を有していなかったため、仏教は無神論に陥つたと指摘する「汎神教」「多神教」は三章で言及したバラモン教を指す。

七、「性理學道義學形而上的哲學」。馬博士^②の言を引き、

「仏教には凡の宗教の根本要点たる神の存在の真理を認め」ないため、

後に至りて一種の形而上的哲學と為つた

とする。これは、「返信1」「返信2」の、儒教の「後学」が天の人格神的な性格を認めなくなった、という論法と類似する。

八、「虚無寂滅」。仏教は世界を「虚幻」「寂滅」「虚無」とするものと主張。

九、「仏教の救贖」。仏教を、「制慾主義を以て独居の方法を立て、寧人類の繁殖を絶たむことを勤めた」として非難し、

之を基督が十字架の死を以て人類救贖の道を立て給ひしに比すれば、甚しき相違がある

としてキリスト教の優位性を主張する。

十、「涅槃及び靈魂の流転」。仏教の輪廻説とキリスト教の靈魂不滅説とを比較し、

佛教が個位的に人の不死を許認せざるに反して、基

督教は死後永久に自我の存在することを教ふ其人生自然の要求に於て両者何れか本性に適合する

とする。ここでは、両説の真偽は問題とされず、「何れか本性に適合する」ことが問題とされている。

十一、「厭世的宇宙論 絶望の宗教」。輪廻説を採ることを以て、仏教は「厭世的宇宙論」を備えた「絶望の宗教と名づけらる」と評する。「名づけ」た主体については言及されない。そうして、

古今無数の罪惡を以てしても神の恩寵の宏大なるに勝つ能はずとする基督教と、見解の距離如何に遠きかを見よ

としてキリスト教の優位性を主張する。

十二、「耶佛内部の相違」。キリスト教と仏教との違いを列挙し、その差異を、「神ある宗教と神なき宗教」、「定理を具ふる道德と定理なき道德」「贖罪主に因る救贖と贖罪主なき救贖」と表現する。

十三、「基督教と天然而上の啓示」。儒教・仏教は、

両者共に有限の才智を以て無限の全能者に向つた

ために真理に到達できず、キリスト教は、

基督教は人智の推測を用ゐずして、一に天上より真理の啓示せらるゝ恩寵を受けた

ために、「他の宗教に秀出して、確實なる証左を握つて居る」とする。この、キリスト教の優位性をただ一点「天啓を受けた」というドグマに帰する論法は、「返信1」「返信2」と同様のものである。

十四、「天啓の証徴」。キリスト教が「天啓を受けた」宗教であることを強調。

十五、「不動不変の証徴」。「奇蹟と預言」の存在が、キリスト教が「世界に度越せる神出の宗教たるを証明」するとする。

十六、「異教の聖賢に対す」儒教と仏教とについて、「天然の啓示は此等より奪はるゝことなし」として再度「基督教に抵触せざる限に於て其遺訓をも尊奉することを辞せず」と寛容な態度を示す。

おわりに

本草稿は、「三教比較」と名づけられてはいるが、そ

の紙幅の多くが仏教批判に充てられている。これに対し、儒教は比較的好意的に扱われており、木菟麻呂の中に「全無缺ノ真教」（「返信1」）であるキリスト教、「基督教に因つて完成せらるゝを待つ」（「儒仏耶三教比較結論」）儒教、「無神論に陥つた」（「儒仏耶三教比較結論」）仏教という序列があつたことが分かる。

木菟麻呂は、仏教の出家主義に関して、仏教が「人類の繁殖を絶たむことを勤めた」として非難している。儒教においても仏教の出家主義は常に批判の対象とされたが、その理由は「不孝に三あり、後無きを大なりとす（不孝有三、無後為大）」（『孟子』離婁上）といった觀念に基づくものである。

また、仏教の輪廻説及び靈魂觀に関しては、キリスト教の靈魂不滅の教説と比較し、靈魂不滅説が「人生自然の欲求」において「本性が適合する」ことを以てキリスト教の優位性を主張している。仏教の輪廻を伴う靈魂觀は、所謂「神滅不滅」論争において、儒教でも否定されが、その理由は儒教では一般的に神（＝靈魂）は死ねば滅するものとされることにある。³⁾

これから、木菟麻呂が仏教を批判する際、たといその批判対象が儒教側のそれと同じであつたとしても、キリスト教独自の理論を以て立論しているといえよう。

二、書誌情報

中井木菟麻呂撰 手稿

〔寸法〕 縦二四・五×横一六・五（cm）

〔書式〕 四周双辺。藍色原稿用紙。10行20字。

〔版心〕 白口。黒魚尾。（葉数）。横二線。

〔内題〕 「儒佛耶三教比較結論」

〔外題〕 帙題簽「中井木菟麻呂キリスト教関係草稿類」。

〔奥書〕 なし。

〔印記〕 「新田文庫」「79CL00529」「開架図書」「大阪

大学附属図書館」

〔装訂〕 仮綴。全十葉。

〔備考〕 上部欄外に朱で章毎に章題を記す。

〔蔵書票〕 [E149 天生関係38 365]

三、翻刻

凡例

・底本として、『中井木菟麻呂キリスト教関係草稿類』（大阪大学附属図書館（懷徳堂文庫内新田文庫）蔵、蔵書票[E149／天生関係38／365]）を用いた。

・翻刻に当っては、底本の文字にできる限り沿うよう留意したが、印刷の都合上改めた箇所もある。

・本篇は改行によって十六の段落に分かれており、それぞれ上部欄外に朱にて当該段落の主題とおぼしきものが付されている。閲覧の便のため、翻刻ではこれに番号を付して行内に繰り込み、段落末に一行空行を設けた。

・句読点は欄外に朱で付されているが、行内に繰り込んだ。

・朱にて付された圈点は、その型式が二種類あるため、翻刻では二種の傍点を用いて再現した。

・一部に附されている割り注は（ ）内に記した。

・底本は手稿であるため、ところどころ朱による修正や見せかけがあるが、修正に従った。

・一部の単語にはルビを付した。

・葉および表裏のくぎりで改行して注記を付した。なお、五節末の括弧は改行と改段とが一致していたため底本に附されていたもの。

儒佛耶三教比較結論

一、三教相對の禮

基督教に於て唱道する所の一體三位の神、天地の創造、人の起原及陷罪、惡の起因及救贖、靈魂の不滅、來世の賞罰等、終始一貫、萬世不動の教義、組織井々たる歴史上の證徴に對しては、我等其立場として全幅の精神を傾けて信奉せざるを得ない。併し乍ら東洋の宗教及倫理に對しても、我等又精思細考して、取舍宜しきを得べき必要あることを感ずる、即儒教は實踐道德に於て、佛教は宗教及哲學に於て、千數百年間國民の腦裏に「一表」浸潤して、二大勢力を成し、將來に於ても亦基督教と並立して、國民教化の重任を負ふこと、思はるれば、我等は木石に崇拜する幼稚なる古來の偶像教と同一視すべきでないのみならず、吾が教義に抵觸しない限は、儒佛諸聖賢の盛德を恭敬して、其教訓に服膺するが當然であらうと思ふ。是と同じく儒佛二教を奉ずる者も、假使其所信の教義を曲げずとも、基督教に對して敬意を表すべきである、諸宗相敵視するが如きは、舊時代の狹量なる思想にて、兎戯に類する者とい「一裏」はねばならぬ。

二、儒教崇天の概念

儒教の天に對する觀念は惟一神教に接近してありて、其眞を捕へ得ざりし者なれば、儒・教・は・基・督・教・に・由・り・て・其・缺・漏・の・補・足・せ・ら・る・。・を・待・つ・者・と・も・見・る・べ・し。此の點に於て基督教と儒教とは相背馳する者ではない。古昔トールン人種の宗教は惟一神教の模型を具へて居つたが、個々の民族に分離したる後は、多神教像教に陥つたに拘らず、獨支那人のみハ古來最上の神體を天と名づけて、諸靈の上に置いた。此の觀念を太古以「二表」

來孔子以上に止まりて、以後は漸次に推理論に傾きたれど、儒教の神髓が惟一神教の模型を脱してゐないことを知らねばならぬ。儒教が基督教に因つて完成せらるゝを待つと見るべきはこゝにあるのである。

三、婆羅門教

印度人も上古は惟一神教に近い模型を具へて居て、凡そ五官に觸るべき神の形象を受けなかつた。マックス・ミュラー(獨逸の佛教學者)の説によれば、上古の印度宗教には惟一神教に近きものが多神教の雲を穿ちて透射せるを見るといふ。然るに「二裏」印度の祭司「ブラモン」等は最上の神體ブラマを以て無意無情の者となして、印度の宗教に凡神教の性質を移し

て、惟心的凡神教を立て、族制を定め、天性に逆ふ所の制慾主義を強行し、斯くして婆羅門教ができた。次で起りたるは佛教であるが、

四、佛教の史的證徴の不正確

基督教歴史の首尾井々たるに反して、佛教の教祖なる佛陀の一代は、妄誕不經の説話に圍繞せられて、是より正確なる史的證徴を見出すことは殆ど不可能の事に属すといふ。第一佛陀在世「三表」

の時代に甚しき相違がある、其時代を錫崙^{セイロン} 緬甸^{ミャンマー} 暹羅^{シヤム}の諸國では基督降世前五世となし、西藏の諸民は三十世となし、(二千四百廿二年至二千九百十九年) 支那蒙古日本にても亦年計を異にして、或八十世、或は十四世と爲して、(九百四十九年九百五十年及千三百七十五年) 百年或は千年を上下す。

五、佛陀の傳記と福音經の記事との比較

佛陀の傳記には福音經の事迹に酷似したる所少からねば、或は佛教が基督教を假借したりといひ、或は基督教が佛教を摹倣したりといふ説が起るのであるが、併し兩者を對比すれば、自か「三裏」

ら趣がちがつて居る。佛陀誕生的事迹に付ては、其父母

が合意を以て同室せざりし夜、菩提薩埵が天より降りて、摩耶夫人の右脇に入り、非常の光輝が全宇を照したと云ふ事、又一の賢明なる老人ありて、奇異なる光と地震とによりて佛陀が天より生るゝ顕象となし、事、天上の諸神が佛陀の誕生を祝讃せし事の如きは、一見基督の降誕に似たるやうなれども、佛陀が王朝全盛の時代に榮華の間に生れしは、之を基督がワイフレム^{ベッレム}の洞穴に生れ給ひしに比すれば、精神上に非「四表」

常の懸隔のあることが見られる、凡そ佛教に於て佛陀及高徒が行つたといふ奇跡は、たとひ實際に行はれたりと假定しても、眞実の奇跡が目的とする所の道德上作善の目的に比すれば、意義なき者多くして、徒に奇異の顯現を以て人を駭かすに過ぎない、是れ眞假の分るゝ所である。

六、佛教無神論の起因

佛陀は「プラミン」等の遁世の法を見聞したれど、未意に滿たずして、「プラミン」等と神の存在の事世界の生出の事に付きて談論した事があつた。凡そ佛教が始めて印度に弘布せられた時、凡神「四裏」教及多神教が之に抵抗を試みたが、此の二教は佛教に對して宇宙の大問題を解決する能力がなかつた為、佛教は遂に無神論に陥つたのである。

七、性理學道義學形而上的哲學

佛教には凡の宗教の根本要點たる神の存在の眞理を認めず。されば其攻究者は之を以て無神論の傾ある一種の性理學と爲し、後の研究者は又單に道義學として、宗教的又哲學的組織を認めず、後に至りて一種の形而上的哲學と爲つたのである、と馬博士（マクスミルレルの事）はいつて居る。」「五表」

八、虚無寂滅

要するに佛教の根本には、婆羅門教と同じく凡神主義に傾いて居る所があつたが、只佛教の一步を進めた所は、世界の生活の最上なる元素をも虚幻に歸して、絶待の寂滅即虚無とすることである。

九、佛教の救贖

佛教の救贖は佛陀が自ら其身を以て代償するのではなくて、教道と模範とを以て自己救贖の方法を示したのだ。佛教に於ては、人間が救贖を得る最大要件は一に滅罪にありとして居る。然るに罪障深き人間にハ、到底尋常の途を以ては其目的が達し難い故に、制慾主義を以て獨居の「五裏」

方法を立て、寧人類の繁殖を絶たむことを勤めた。さ

れど獨居無妻主義は一般に行はるべき者ならねば、遂に僧俗を二途に班別すること、なつたのである。之を基督が十字架の死を以て人類救贖の道を立て給ひしに比すれば、甚しき相違がある。

十、涅槃及靈魂の流轉

佛教は人生をして全玄靜寂無爲の境界に至らしめむと欲するよりして、遂に凡の意識を絶滅し、一切の希望を滅盡して、寂滅無爲の法性を究むるを終極の目的と爲し、之を涅槃と曰ふ。然る「六表」

に涅槃に達することは、限ある現生の爲し得べき所ならねば、此よりして佛教にも婆羅門教の如く靈魂流轉の説起りて、三界六道に迷の生死を重ねて、入涅槃の目的を達する途を示すこととなつた。斯く佛教が個位的に人の不死を許認せざるに反して、基督教は死後永久に自我の存在することを教ふ其人生自然の要求に於て両者何れか本性に適合する。

十一、厭世的宇宙論 絶望の宗教

輪廻に由つて許多の苦痛を嘗めし者が涅槃に入るを以て無上の幸福とするは、生存して重苦「六裏」

を受けむよりは、寧生存せずして無に歸せむことを願ふ

故なり。斯る暗黒なる厭世的宇宙論を絶望の宗教と名づける。それは生命の神の代に一切を呑む所の虚無を立つるからである。生命を滅盡せずしては滅罪の目的を達する能はずと為して、罪惡以上、有能の者を認めないのは、古今無数の罪惡を以てしても神の恩寵の宏大なるに勝つ能はずとする基督教と、見解の距離如何に遠きかを見よ。

十二、耶佛内部の相違

佛教の基督教に似たる所は、外部に於ては國家「七表」に屈せざる獨立の教位を有する事、諸種の外儀、修士の契約、慈悲愛憐の行為等、許多あれども、内部の精神に至りては兩者相反對す、即神ある宗教と神なき宗教、定理を具ふる道德と定理なき道德、贖罪主に因る救贖と贖罪主なき救贖である。

十三、基督教と天然而上の啓示

儒教は天然心理力の要求によりて、直覺的に天に上帝あることを認識したけれども、譬へば霞を隔て、遠山の花を望むが如く、茫然として其真相を捕へることができなかつた故、其末流は「七裏」

遂に惟理論に傾いた。佛教は精微なる眼識を以て宇宙を洞察したれど、虚無寂滅の外に何物をも捕捉することが

できなかつた。兩者共に有限の、人智を以て無限の、大能者に向つたからである。此の點に於ては、基督教は人智の推測を用ゐずして、一に天上より眞理の啓示せらるゝ恩寵を受けた。基督教の定義は實に斯く天然而上に啓示せられたるが故に、基督教は天啓教の稱號を以て他の宗教に秀出して、確實なる證左を握つて居るのである。それは人間の能力を以て窮む可「八表」

からざる奥妙なる眞理を天然而上の方法を以て開示せられたからである。

十四、天啓の證徴

天然而上の啓示は、宗教上に缺くべからざる目的を達せしむるを以て其根本の證徴と為して居る。此の證徴に適合せざる者にして、天然而上に啓示せられることは断じてないのである。凡そ外形上に天然而上の者に似たる不可思議の現象や驚くべき事跡が伴つても、是れ必しも天然而上の啓示と言ふべき者ではない。天然而上の啓示には、神の教會を地上に建設する確乎た「八裏」

目的と人類の救贖に缺くべからざる條件とが具つて居らなければならぬ。此の證徴なき者は天然而上の顯現とは見るべからず、人類救贖に関する如何なる目的をも有せず、又高尚なる宗教的道德の深き趣味と融合せざる現

象は、如何に解し難く駭くべき異常の顯現にても、此の範圍に属しないのである。凡て天然人為の宗教は天然に神を識る途に由つて達し得らるゝ極點以上には達することができない、是れ其宗教の天より啓示せられない證據と知る〔九表〕

べし。基督教は神の外誰もしる能はざる神の深情を開示せらるゝが故に、聖二者の奧義、神の藉身の秘義、及死者の來世復活の秘義等を解釋することができるのである。

十五、不動不變の證徴

以上列記したる目的の下に不動不變の證徴として上天より開示せられたる者は奇蹟と預言とである。之に因つて基督教は世界に度越せる神出の宗教たるを證明するに足るのである。

十六、異教の聖賢に對する態度

斯く我等は基督教を天下諸宗教の上に置きて、信念を他に移さねども、又思を儒佛二教に及ぼ〔九裏〕
 すに、聖書及古來教會諸聖賢の教には、異教世界も神の照管を以て救贖に預備する範圍より除かれず、彼等は天然而上の啓示を受けざれども、自己の心靈の才能の及ぶ

限、神及世界の事を究むるが故に、天然の啓示は此等より奪はるゝことなし。神は己の事を異教世界にて證示すと云はれてある。我等が儒佛二教の聖賢をも尊敬し、基督教に抵觸せざる限に於て其遺訓をも尊奉することを辭せず、と云ふは是が為である。〔十表〕

注

- (1) 『中井木菟麻呂キリスト教關係草稿類』(大阪大学附属図書館(懷德堂文庫/内新田文庫)蔵、藏書票B25) / 天生關係38 / 365) は、中井木菟麻呂によるキリスト教關係の論說草稿手稿。一帙に原稿用紙を仮綴した五冊の抄本を収めており、表紙題簽等は附されていないが、一行目にそれぞれ「正教訳語改定上ノ私見」・「聖母原罪有無論」・「第一月一日 聖六尾西利乙ノ伝」・「儒仏耶三教比較結論」・「大主教ニコライ師ノ命ヲ奉ジテ中井木菟麻呂覆ス」・「中井木菟麻呂再」と記されている。本稿では、「大主教ニコライ師ノ命ヲ奉ジテ中井木菟麻呂覆ス」を「返信1」、「中井木菟麻呂再」を「返信2」と略称する。

- (2) 自注に「マクスミルレル」とあり、イギリス(帰化ドイツ)の東洋学者フリードリヒ・マックス・ミュラー(Friedrich Max Müller)のことと考えられる。

- (3) 「神滅不滅」論争とは、梁代、范縝の『神滅論』(形(肉体)

と神（靈魂）との関係を、刀の本体（質）と切れ味（用）という比喻を用いて、刀が無くなれば切れ味がそれだけでは存在できないように、肉体が減すれば靈魂も減すると論じた）に始まる、神（＝靈魂）が死後消滅するかしないかの問題に関する論争。僧祐編『弘明集』（『大正大藏經』卷五二）に多く関連資料を収む。